苗場山麓ジオパーク

Vol. 28

振興協議会だより

［発行日］平成29年12月18日
［発　行］苗場山麓ジオパーク推進室
［お問い合わせ］025-765-1600

第５回中部ブロック大会

11月19・20日の2日間、第５回日本ジオパーク中部ブロック大会が、飯田市含め10市町村で構成されている南アルプス（中央構造線エリア）ジオパークで開催されました。日本ジオパークネットワーク加盟の中部ブロック13地域が集まり、情報交換や各地域が抱える問題及び解決方法を話し合いました。

日本のチロルと呼ばれる下栗の里を望む

19日には、国内150軒以上のゲストハウスをめぐり、ゲストハウス紹介サイトFootPrintsの編集長をされている前田有佳利氏を迎え「ゲストハウス100人と地域の想いをつなぐ」というタイトルで基調講演・パネルディスカッションを行いました。ゲストハウスは宿泊と交流により、地域を知ることができる「体験型メディア」という事で、ジオパークにあるゲストハウスでは土地の物語（ジオストーリー）をうまく地域の説明の中に取り入れることで、お互いに補完し合えるのではという意見が出されました。

20日には「日本のチロル」下栗の里を視察しました。展望台やそこに行く道も地域のガイドや住民により整備されているという事で、自分たちで地域を守り生きていくという気概が感じられました。来年度の開催場所は伊豆半島の予定です。

中津川左岸のトレッキングコースをご存知ですか？

中津川左岸に位置する“前倉のトド展望台”からの眺めは、深い中津川渓谷と苗場山との関係を眺望するのに適した素晴らしいロケーションです。振興協議会は、この中津川左岸の前倉トドと石坂を結ぶトレッキングコースの第１期整備計画に着手しました。そのスタートが龍辰峰です。上流側は穴藤まで、下流側は百合窪村跡までトレッキングコースが結ばれました。来年は、百合窪村跡から石坂を結ぶ予定です。将来的には石坂－龍辰峰－前倉のトドを経由して、鳥甲牧場－矢櫃村跡－大秋山村跡－切明を結ぶ計画です。このたび整備したコースは“石落し”の岩壁の上を歩くもので、見玉公園や太田新田滑落壁などが一望できます。来年、石坂までコースが開いた段階でツアーを企画しますので、快適な汗と笑顔、そして、清々しい渓谷風でストレスをふっ飛ばしましょう！

足下は石落しの絶壁

河岸段丘と信濃川の展望台（通称：川の展望台）完成

信濃川の左岸に新しく「河岸段丘と信濃川の展望台（通称：川の展望台）」が完成しました。場所は、押付地内の日本食研保養所の下で、元マウンテンパーク津南スキー場のリフト架台があった場所です。車椅子でも展望台までへと行けるように平らな道を伸ばし、信濃川へ突き出すようなウッドデッキとなっていて、駐車場も整備されています。ここからは、眼下に信濃川を望みながら、中津川の右岸に広がる、平らな段丘面と杉が植樹された急峻な段丘崖からなる河岸段丘をより近くに見ることができます。

他のジオパークの再審査を見学して

●佐渡ジオパーク再審査（11月11・12日）

再審査会では佐渡側からは、この４年間で起きた良い変化のうち、「資源の保全・市民への教育・地域住民・ガイド」についてを取り上げ、その変化がわかる場所をのちに視察に行くという構成で行われました。

審査員からもパンフレットへのロゴ使用時、掲載内容を確認しているかなど、取り組みに対し様々な意見や質問がありましたが、佐渡側、審査員側が重要視している審査時の要点は、①「住民主体」の動きが基本となっているか、②運営としてはジオパークの政策面等で立ち位置をはっきりさせているか、③ジオパークに来た時にここがジオパークだとわかるように、目印や誘導できるものを置いているか、というものだったと感じます。

また、審査員や佐渡の意見や事例交換が多く、やはり「再審査」という言葉はついているが、「健康診断」なのだ、とも感じました。

ヒアリングの様子（佐渡）

●下仁田ジオパーク再審査（11月14・15日）

下仁田ジオパークは２年前に再審査を受けましたが、官主導で民間のボトムアップがないということで２年間の条件認定となっていました。今回その２年がすぎ、再度審査が行われました。見学して感じたことは、①拠点施設の一つ、旧小学校の活用の展示を見学しました。そのまま、苗場山麓で進めている旧中津小の展示や配置など、内容・質量とも参考になるものでした。②協議会の構成メンバーに小・中・高等学校の代表が入っていて、２日目の関係者とのヒアリングにもこの代表者が参加し、各校におけるジオパークに対する取組みの報告がありました。教育の知見から苗場山麓でも必要ではないかと思われます。③協議会場の設置とプレゼンの準備、ガイドとの打合せと運営などが参考になりました。また、ガイドの積極的な取組や各館での丁寧な説明には学ぶことが多くありました。

サイト視察（下仁田）

このような先進地域の取組みを参考に、苗場山麓も来年の再審査に向け頑張っていきましょう！

立教大学観光学部ジオパークモニターツアー

昨年に続き、立教大学観光学部・舛谷ゼミ20名（学生19教授１）と立教大学の留学生５名、計25名が12月２・３日で苗場山麓ジオパークを訪れ、ジオサイトなどを巡りました。留学生の国の内訳は中国３名、フィジー１名、ボツアナ１名でした。そのうち１名は、昨年日本遺産ツアーにも参加し、なじょもんで縄文文化に触れた方も含まれており、驚きの再会でした。

１日目は、のよさの里での鳥甲山の眺望、布岩山、とねんぼ、石落しと中津川流域の秋山郷周辺を巡りました。昨年は、訪れることができなかった場所も巡りました。

２日目は、農と縄文の体験実習館において立体地形図を使っての解説、縄文土器に触れる体験を行ったほか、新しくできた「河岸段丘と信濃川の展望台」を訪れました。天候に恵まれ、信濃川と河岸段丘の素晴らしい景色を見て頂くことができました。アンケートでは、「フォトジェニック」、「インスタ映えする！」などの感想を多く聞くことができました。

その後、津南町観光物産館でお土産品などの確認や、雪が降る前の冬の龍ヶ窪を巡りました。龍ヶ窪では、木々の葉が落ち、池をより広く感じ、水の透明感も大変引き立つ光景を見ることができました。

河岸段丘と信濃川の展望台にて

お土産品などもチェック

今後、ツアーのアンケートを取りまとめてもらい、苗場山麓ジオパークの感想を報告書として提出して頂く予定です。速報では、「バス移動が長い」、「もっと歩くのを増やしてほしい」、「解説に専門用語が多い」、「多言語表記がない」、「スポットを巡るツアーでなく、体験型のアクティビティが必要」、「自然に触れる時間が少ない」など厳しくもありがたい意見も頂きました。

この結果なども踏まえて、来年３月22・23日に開催される「雪国フォーラム」の基調講演の中で、舛谷先生よりジオパークと観光、アクティビティについて触れて頂く予定となっています。

来年度以降も、立教大学との連携事業を進め、外からの視点での指導、助言を頂くことが重要と考えます。

苗場山麓ジオパークのジオサイト

57の見どころを随時紹介していきます

鬼沢火砕流跡

所在地 栄村　**種 別** 地質

鳥甲山の噴火は、大きく見るとⅠ～Ⅲ期に分けられます。最初の活動は前倉溶岩と火山砕屑物の噴出です。安山岩の溶岩（柱状節理が発達）は、前倉付近まで流れ、火砕流や泥流は北方に20㎞以上も流れ、先端は魚沼層群上部の堆積した浅い水底に流れ込みました。

第Ⅱ期の活動はデイサイト（石英安山岩）と安山岩の爆発的な噴火で鬼沢火砕流、高山沢火砕流、上野原溶結凝灰岩が広い範囲に流れ出しました。

鬼沢火砕流堆積物は、山頂の南西側の秋山林道や鬼沢付近に広く分布しています。高山沢火砕流堆積物は、北側の高山沢付近に分布し、勘五郎の滝をつくっています。上野原溶結凝灰岩は中津川の西側の低いところや東側の上野原一帯に分布しています。秋山林道沿い、布岩山中腹にも分布しています。これらの噴火で大きなカルデラができました。北側のカルデラの壁には布岩山の溶岩が流れ、柱状節理ができました。

第Ⅲ期の活動はカルデラの内部で噴出しました。この活動により滝沢溶岩、尾根山、白倉山、山頂溶岩が流れ出し、現在のような山体ができました。写真の露頭の上部は溶結凝灰岩、下部は軽石流の地層です。

魚野川左岸の遊歩道（東電トロッコ跡）

所在地 栄村・山ノ内町　**種 別** 地質

昭和28年に着工された渋沢ダム・切明発電所建設のためにトロッコが敷設されました。このトロッコは、魚野川左岸を切明から渋沢ダムまで走っていました。現在は、そのトロッコ路線が遊歩道となっており、切明からおよそ３時間30分で渋沢ダムまで行くことができます。遊歩道沿いには、結東層を見ることができます。結東層は、新第３期（1,800～1,500万年前ころ）にできた苗場山麓で一番古い地層です。海底の火山活動による安山岩や玄武岩の溶岩と火山砕屑岩でできています。海水の影響か変質して緑色となっているので、総称して緑色凝灰岩（グリーンタフ）と呼ばれています。結東から小赤沢付近までの中津川沿いには溶岩が多く、魚野川や雑魚川沿いには火砕岩が多く露出しています。玄武岩の中には、水中で噴出したことを示す枕状溶岩（溶岩が冷えるときに粘性が弱いため枕を重ねたように固まった溶岩）が見られます。その中に挟まれている黒色泥岩や頁岩（どちらも元は泥）には有孔虫の化石を含んでいます。この有孔虫は深海にすんでいる種ですので、玄武岩溶岩はかなり深い海底で噴出したことがわかります。

※地質学の学説は複数あり、現在も研究が続いています。そして、本地域の調査研究がこれからも行われる必要があります。

千駄ヶ谷ＮＩＰＰＯＮ食祭市に参加しました

10月28・29日、2020東京オリンピックのメインスタジアムに近い千駄ヶ谷鳩森神社近傍の商店街が企画した日本酒と食のイベント“第１回千駄ヶ谷NIPPON食祭市”に苗場山麓ジオパークのブース出店を試みました。津南と十日町の酒と米、そして新鮮な野菜がメインです。その美味しい米や酒は、雪深いブナの森で育まれた水の産物であり、その水は豪雪が生み出すミネラルウォーターです。さらに5,000年前の縄文時代から営々と歴史文化を紡いできた奇跡の大地で作られていますという「雪国文化：米と酒物語」を語り、火焔型土器にも触れて頂きました。台風に見舞われましたが盛会に終了しました。ただ都会に方々のモノを売るのではなく、歴史文化を背景に語り、心をモノに添えてお渡しすることの素晴らしさを体感してまいりました。雨降って地固まる、2020に向けて千駄ヶ谷から出発しました！

「苗場山麓ジオ新聞」掲示中

津南小４年生は、「津南町と栄村の未来をつなぐ！苗場山麓ジオパークのTakaramono♪」を今年の総合学習のテーマとして学習してきました。栄村のジオサイトの情報収集からはじめ、それらジオサイトの調査ツアーにもでかけました。夏休みには、栄村のジオサイト認知度調査を行いました。調査人数146人中、「栄村のジオサイトをほとんど知らない」と答えた人が57％という結果でした。その結果をふまえ、学習の成果として、児童一人一人が「苗場山麓ジオ新聞」を作成しました。児童51人分の新聞は、なじょもん・津南町役場ロビー・クアハウス津南のほか、栄村役場ロビーや津南駅などに掲示されています。みなさん、ぜひ足を運んでジオ新聞をご覧ください。

魚沼地区高等学校ＰＴＡ連合会の研修会に参加して

11 月 28 日、ニュー・グリーンピア津南で行われた魚沼地区高等学校 PTA 連合会の研修会にお招きいただき「苗場山麓ジオパークの魅力と社会的意義」と題し講演させていただきました。要旨は、ジオ＋エコ＋カルチャーの素晴らしさを認識し、未来を担う子ども達に“郷土教育”や“防災教育”を通して、郷土愛の育成や誇りの醸成を進めるところに目的がある。そのインストラクターや伝承者として、これから増加するアクティブシニア層（元気なお年寄り）の参画が大切であること。すなわち、地域資源の学習や保全活動を地域のアクティブシニア層と未来を担う子ども達が、汗をかきながら活動することに本位がある。そしてその活動を風聞した首都圏 2,500 万人が、200 分のアクセスで苗場山麓に体験旅行に来てくれることが、副次的効果としての地域振興であるというジオパークの本質をお伝えしてきました。

平成29年度砂防講演会参加記

11 月 24 日、新潟市の万代シルバーホテルで新潟県土木部砂防課主催の「砂防講演会」が開催され、苗場山麓ジオパークが選ばれ、「苗場山麓の形成と災害、そして地域振興」と題して講演を行ってきました。まずは、日本列島の形成にあたり、糸魚川―静岡、館山－湯沢－小出－新発田を結ぶラインの内側は海であり、そこをフォッサ・マグナと呼ぶことから始め、海底堆積物が隆起したのち、毛無山（110 万年）、鳥甲山（70 万年）、苗場山（30 万年）の順番で噴火し溶岩を流したこと。その後、河岸段丘が形成されたこと、数多くの崩落など災害イベントが繰り返された結果として現在の地形があること。約 8,000 年前に対馬暖流が日本海に流れ込んだことで多雪化現象が生じ、縄文時代から営々と雪国文化を形成してきた奇跡の大地であることなど、ジオ＋エコ＋カルチャーを地域資源として捉え、保全と活用を進める考え方をお伝えしました。そして、未来を担う子ども達への郷土教育を第一義としながらも、地域振興としての観光との融合の必要性を指摘しました。すなわち、苗場山麓のポテンシャルの高さと第三者による評価、ライセンスの認定をもって、単なる観光地をつくるのではなく、観光を通して持続性のある地域を創ることの大切さをお伝えしました。